

世親教学と浄土思想

(一)

『無量寿経優婆塞願生偈』はその題名の示す如く、
無量寿経に基づいて願生を意示したものであるからそ

れは単なる釈経論ではなく、

「世尊我一心
歸命尽十方

春日井全倫

無碍光如来

願生安樂國」

と云う世親自らの純粹な宗教的心情によつて述作されたものである。

しかし、斯論の所依經である無量寿經が如何なる無量寿經であるかについては古来より論議されているが未だにその結論を得ることが出来ない。しかし從來から二乗種不生説が「悲華經」「瑜伽師地論」に基くとする説、或いは蓮華感世界の説が「華嚴經」に基くとする説、亦、三種廿九句の淨土の莊嚴が、「授大乘論」の十八円淨説に依るとする説、更に五念門と「瑜伽師地論」或いは「平等覺經」との關係を指摘しているがこれは夫々の立場に於いて斯論の構成素材を検討したものである。かくの如く斯論は釈經論であることを題名に明示しながら基だ宗教論的な形式によつて記述されている為に一經を撰定することは現在に於ては不可能な問題である。しかし斯論の理解は著作者世親の教学的立場、思想に基いて行うことが最も妥当であると考えられる。即ち世親教学の思想的背景、もしくは構成基盤となつてゐるものは何であるかを知る必要

がある。

說一切有部に於て出家した世親は經量部の教義を学び、有部教学を研讀して『阿毘達磨俱舍論』を著したが、後肉兄無着の教誡によつて大乘仏教に帰依した。大乘に転じた後の彼の教学の中心が何処にあつたかについては多岐に渡る彼の教学の中から決定する事は困難であり、古来より多くの論議がなされて来たが、一応その教学の中心は當時の大乘仏教の二大流派とも云われる中觀学派に対する瑜伽行学派に属してゐたとみられるのが妥当であらう。②

中觀瑜伽を学んだ世親は、中觀仏教への批判をなしつゝ更に瑜伽仏教の研讀を重ね、多くの著作を成し、『唯識廿論』『唯識卅頌』によつて唯識思想は大成されたのであるが、『仏性論』もまた彼の思想の円熟期の著作として重要なものであり、この『仏性論』の如来藏品を始め彼の説くところの如来藏説は彼の学説中究竟的なものであり、他を統括するものであると云われてゐる。

従つて世親教学の中心思想と云わるべきものは彼が肉兄無着より継承しその思想の根底となつた唯識思想

と、その究竟的な能であると思われる如来藏思想であるところと見ることが出来るのである。従つてこのような思想的基礎の上に建てられた浄土思想は当然龍樹等の中観学派の立場とは大いに異なるものでなければならぬ。即ち前章でも述べた如く人法二空を主張する龍樹にあつては空の究竟的な諸法の実相を対象視することを否定して「空亦復空」と説き又、『大智度論』に於て浄土を説く場合も、あくまでも無相の相とし、端的に浄土の有的性格を表現しようとはしない。これに對して世親の場合は空の有を主張し、絶對の対象としての浄土を建て得た瑜伽行学派の立場は中観仏教との間に一線を画し得るものである。

以上のような意味において『往生論』を唯識、如来藏両思想によつて把握することは重要な問題であると共に、唯識如来藏思想を離れて眞に『往生論』を把握することは困難であらうと考えられるのであり、龍樹の空思想に於て理解された曇鸞の註による理解方法の轉換が要請されるのである。

①

(二)

次に、このような立場に於いて『往生論』の阿彌陀仏浄土と蓮華藏世界の問題を考察してみよう。

既にふれたように、蓮華藏世界説は『華嚴經』に依るものであるが、『往生論』の

「無量大宝王

微妙浄華台」④

と云う偈は『摂大乘論』とその釈の大蓮華王を浄土の依止と為さんとする説に基いたものである。世親は更に『往生論』の長行に於て五功德門の第三に作願門の果相を無門と名づけ

「入第三門者以一心専念作願彼生修奢摩他寂靜三昧行故得入蓮華藏世界」⑤

と説いている。しかるに作願門に於ては、

「云何作願心常作願一心専念畢竟往生安樂国土欲如実修行奢摩他故」⑥

と云い、「往生安樂国土」の作願の功德を入蓮華藏世界と為しているが、これは安樂国土と蓮華藏世界とが同一であることを説き、更にそれが『往生論』の第一義諦妙境界相であり、即ち阿彌陀仏浄土と蓮華藏世界との同一を説かんとするものであらう。

「摂大乘論」は無量の功德衆の莊嚴する所の大蓮華王を淨土の依止と爲し、世親はこれを釈して七つの例によつて大蓮華王を大乘所願の法界真如に譬えてゐる。^①

第一に蓮華は泥水の中に在つても泥水に汚されることなく常に清淨であることを法界真如が世間の中に在つても世間の法の爲に汚されず清淨であるのに譬えてゐる。これは出世間無分別智が再び世間に還つて清淨世間智として働き不淨なる世間を清淨にし自らはその不淨に染まないことを指してゐるのであらう。また蓮華が自ら開發するのを法界真如の性が自ら開發するのに譬えてゐるがこれは虚妄分別を滅することによつて真如が開顯することを、即ち転識得智を指してゐるのであり、世界に出現した法界真如たる淨土は唯識智を体となすことを示したものであらう。また蓮華に群蜂が集つて蜜を採るのを法界真如が聖衆によつて用ゐられるのに譬えてゐるのは淨土の功德を述べたもので、一切の群萌が淨土を対処とし觀察を行うことによつて愛樂仏法味禪三昧爲食することを示したものであらう。また蓮華の香、淨、柔軟、可愛の四徳に對して法界真如の常、樂我、淨の四徳を説いてゐる。これは如来の

法身の功德としての四波羅密であり、無常を常とみ、苦を樂とみ、無我を我とみ、不淨を淨とみる、常、樂、我、淨の四顛倒を對治して無常、苦、無我、不淨の四不顛倒が立てられるのである。これは常、樂、我、淨の邪見、分別所執をしりぞけ正見の立場であるが、これも二乗の見であるとして否定され、如来の法身はこの二乗の見を更に對治した常、樂、我、淨の四波羅密として立てられるのである。^②この四波羅密を蓮華の香、淨、柔軟、可愛の四徳の一々に当てはめてしまふのは困難であらう。こゝでは單に四と云う數字に譬えられたものと理解した方が至当であらう。

また次に衆華の中に於て最大であり、最勝であるから王と名づけるのを、法界真如が一切の法の中で最勝であるのに譬えたとあるが、これは法界真如の相對を越えた、所謂一切法の依止となると云う点で絶対性、勝義性を云わんとしたものであらう。また蓮華は無量の色相の功德衆の莊嚴するところであり、法界真如が能く淨土の依止となるのに譬えたとあり、更に續けて如来の願力の感ずる所の宝蓮華は、諸華の中に於て最大にして最勝なるが故に王と名づくとあるが、この無

量の功德衆の莊嚴すると云うのは諸仏の受用身を指し、それが浄土の依止となると云うのはこの受用身によつて浄土が建てられることを意味するのであり、これは、『往生論』の

「此三種成就願心莊嚴応知略説入一法句故」^⑨

に於ける真如法性が三種願心成就莊嚴の態即ち浄土として顕現したことを示すものであり、仏の無分別智及び無分別後智の力用を示すものである。

(三)

以上『往生論』の著作者世親の教学的立場に基づいて蓮華藏世界を阿彌陀仏浄土の問題を考察したのであるが、彼の浄土思想は唯識思想の究極として建立されたのではなく、むしろ唯識思想に基づく一理解としての浄土ではなからうかと考えられる。それは単なる試みでなく唯識觀に於て闕けているものを浄土觀に於て充足せんとしたものであり、その意味に於て浄土觀はあくまでも瑜伽行に附順する行法と云うことが出来る。従つて浄土思想を以つて世親の教学の究極と考えることは少々困難な理解ではなからうかと思われるのである。

る。しかし『往生論』に示された仏土の思想は瑜伽唯識説によつてはじめて正攻を得たと云うべきであり、龍樹の浄土思想に比して大いなる進歩の後がみられ、印度に於ける浄土教の大成者としての功績は勿論であるが、後の浄土教発達史に於ても極めて重要な役割を果たすのである。

註 ① 浄全一、一九二

② 藤吉慈海「瑜伽行派に於ける浄土教の問題」(仏教文化研究第一号)

工藤成性著「世親教学の体系的研究」(三二三頁)等の見解に基づく。

③ 藤堂恭俊「僧肇と曇鸞」論註に於ける僧肇の役割——

(印度学仏教学研究第四卷第二号六四頁)に於て述べられている世親教学と異なる龍樹・僧肇・曇鸞のその歴史的必然性に対する見解及び同「世親の浄土觀」(仏教文化研究第四号一一七頁)及び同「無量寿經論序觀」(仏教大学学報昇格記念号二三頁)に於ける論註の教学的立場に対する見解が述べられている。

④ 浄全一、一九二

⑤ 浄全一、一九八

註 ⑥ 淨全一、一九三
大正三一、二六四 A

以大蓮華王譬大乘所顯法界真如蓮華雖在泥水之中不為泥水所污譬法界真如雖在世間不為世間法所又蓮華性自開發譬法界真如性自開發衆生諸証皆得覺悟、又蓮花為群蜂所採譬法界真如為衆所用又蓮花有四德、一香、二淨、三柔軟、四可愛、譬法界真如總有四德、謂常樂我淨於衆花中最大最勝故名

註 ⑧
註 ⑨

為王譬法界真如於一切法中最勝此花為無色相功德衆所藏莊嚴能一切法依止譬法界真如為無量出世功德衆所藏此法界真如能為淨土依止後次如來願力所感宝蓮花於諸花中最大最勝故名王無量色相等功德衆所莊嚴能為淨土作依止此句名依止淨山口益著「般若思想史」六如來藏思想一〇三頁參照淨全一、一九六